

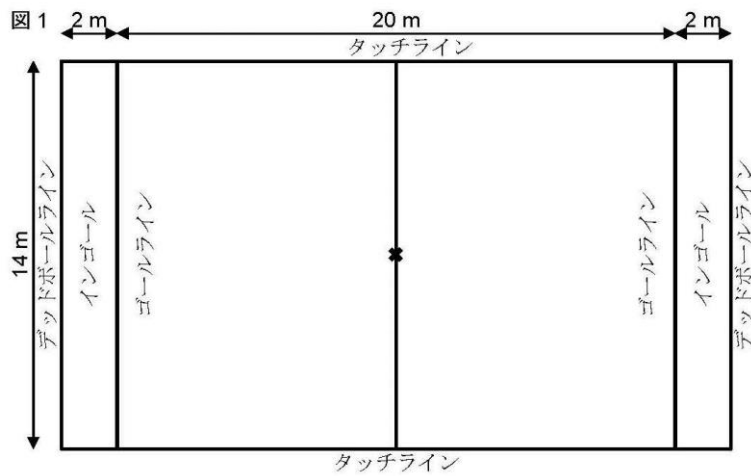
低学年（幼児、小学 1,2 年生：U-8）競技規則（案）

（公財）日本ラグビーフットボール協会の「タグラグビー競技規則」のルールは幅広い年齢層を対象としており、「全国小学生タグラグビー選手権大会」の大会要項も、大会の参加資格にある小学校 4 年生以上が対象となっているため、このまま低学年に適用するのは困難と考え、特異な事項や補足を追記して、愛知県内での交歓会、交流試合等での適用を提案するものです。

なお、「タグラグビー競技規則」と異なる点、追記した事項については、青色太字としている。

第1条 コートの形状

「タグラグビー競技規則」に準じて下記のコートとするが、会場及び選手の実態に応じて縦横の長さを変えてもよい。



第2条 タグの装着

腰の両サイドに1本ずつ2本のタグを装着し、自立しているものがプレーできる。



低学年（幼児、小学 1,2 年生：U-8）競技規則

第3条 ボール

選手の身体能力を考慮し、3号ボールを使用する。

第4条 プレーヤーの人数

チームは5人とし、全員参加を目的に入替回数に制限をつけない。

第5条 試合時間

10分ハーフ以内とし、1日の試合総時間は原則40分以内とする。
なお、攻撃の途中でも試合時間を経過した時点で試合を終了する。

第6条 コーチについて

試合中、各チーム1名のコーチがグラウンドに入り、自チームの後方で攻守の妨げにならない位置より、自チームの選手に指導することが許される。
また、自力でタグを取り付けできない場合に限り、それを助勢することができる。

第7条 試合の開始と再開（フリーパス）

ジャンケン等により最初に攻めるチームを決める。

攻める側のチームの、コート中央からのフリーパスで試合を開始する。

フリーパスとは、ボールを持ったプレーヤーがその位置から動かずに、味方のプレーヤーに行うパスのことである。その時、相手チームはボールのある位置より5m（7歩）下がらなければならない。

フリーパスは、ゲーム開始またはトライ後の再開のためにコート中央から、また、ボールがコート外に出てしまった時にその場所から、あるいは反則が起こった時にその場所から、ゲームを再開するために行われる。

反則がインゴールの中やゴールラインまで5m以内で起きた場合は、フリーパスはゴールラインからコートの中央へ向かって5mの場所で行う。

フリーパスを受けるプレーヤーはパスを行う者の真横または後方2m以内に立ち、パスを受けてから走り出すこととする。

相手チームの全員が5m下がり終わるまではフリーパスしてはならない。下がる前にフリーパスした場合は、ゲームを開始せずフリーパスをやり直す。

ただし意図的に下がらない場合は、オフサイドとして5m前方の位置から再開する。

第8条 パス

ボールを持ったプレーヤーは、前後左右どの方向にも自由に動くことができる。

パスはいつしてもかまわないが、ボールは真横か後方へしか投げることができない。

前へ投げてしまった場合は「スローフォワード」の反則となり、その場所から相手チームのフリーパスでゲームを再開する。前へとは、相手ゴールラインの方向である。

第9条 ノックオン

パスをとりそこねてボールを前へ落とすことは、スローフォワードと同じくボールを手で前へ進めたことになるので「ノックオン」という反則となる。

それが起きた場合は、その場所から相手チームのフリーパスでゲームを再開する

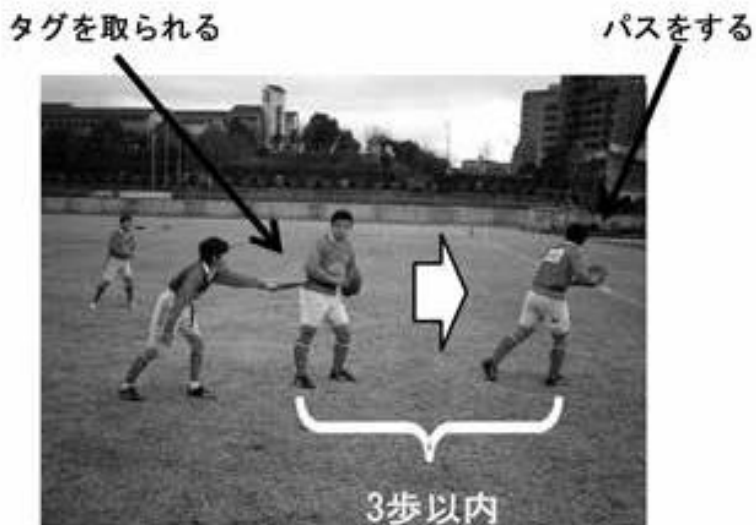
第10条 タグ

ボールを持って走ってくるプレイヤーの前進を、守る側はボールを持っているプレイヤーの左右どちらか一つのタグをとることで止めることができる。このプレーのことを「タグ」という。

守る側は、タグをとったら頭上に掲げ、皆に聞こえるように大きな声で「タグ！」とコールしなければならない。

タグをとられたプレイヤーは、すぐに走るのをやめて止まり、できるだけ早くボールをパスしなければならない。全速で走っていたとしても、タグをとられたらただちに止まることが求められる。めやすは 3 歩以内であるが、これはタグをとられてから 3 歩は動いてもよいことを意味するものではない。

図8
タグを取られたら
3歩以内にパス



タグをとったプレイヤーはそのタグを手渡しで返すまで、タグをとられたプレイヤーはとられたタグを返してもらって再び腰につけるまで、ゲームに参加することはできない。

攻めている側が 4 回タグをとられたら攻守交代となり、その場所から相手側のフリーパスでゲームを再開する。ただし、インゴールでタグをとられた場合は、ゴールラインからコート中央へ向かって 5 m の場所からゲームを再開する。

ボールを持っているプレイヤーは、タグをとりにくるプレイヤーから身をかかわしてよいが、タグをとることをじゃましたり、とられないように手で押さえたり隠したり、ジャンプしたり体を一回転以上させることはできない

選手の能力に応じ、タグをとったプレイヤーの代わりにグラウンド内のコーチが「タグ！」とコールしてもよい。

身体が接触するプレーを軽減させるため、タグをとられてパスをするまでの間は、守る側のプレイヤーはボールを奪ってはならない。

また、守る側とは逆側の腰のタグをとってはならない。

ボールを保持するプレイヤーが転倒してノックオンとならなかった場合、ボールの争奪は行わず、ゲームを中断してタグを 1 回とられたこととして、転倒した場所から再開する。

なお、転倒した場所がゴールラインの手前 5 m を過ぎている場合は、手前 5 m より再開する。また、転倒にてタグが 4 回に達した場合は、転倒した場所で攻守を交代する。

第 11 条 オーバーステップ、オーバータイム

タグをとられたプレーヤーが「タグ！」とコールされてもすぐに止まることができずに 3 歩を超えて動いてしまった場合は「オーバーステップ」の反則となり、その場所から相手チームのフリーパスでゲームを再開する。

また、止まってからパスをする前に 3 秒を超えてしまった場合は「オーバータイム」の反則とする。

ただし、選手の能力に応じて 3 歩、3 秒を緩やかに対応してもよい。

第 12 条 得点の方法（トライ）

相手のインゴールの中に走り込んでボールを置けば「トライ」で 1 点となる。

トライの後は、得点をしていないチームのコート中央からのフリーパスでゲームを再開する。

ゴール直前でタグをとられたがそのままインゴールに入ってトライした場合は、トライは認められず、ゴールラインから 5 m の場所まで戻ってフリーパスでやり直すこととする。それまでにとったタグの回数は継続とし、ゴール直前でとったタグが規定の回数であったならばそこで攻守交代となる。

つまり、腰に 2 本のタグをつけて、自立して両足がインゴールに入ったプレーヤーだけがトライできる。飛び込みトライは認めず、転倒した場合と同様にゲームを中断して、タグをとられたこととして再開する。

会場が屋内などのように固い場所などでは、ボールを保持して両足がインゴールに入った時点で「トライ」としてもよい。

第 13 条 オフサイド

守る側のプレーヤーが故意にボールより前（オフサイドラインより前）の位置に立って攻める側のタグ後のパスをじゃましたり、横取りしたり、パスを受けるプレーヤーの近くまであらかじめ先回りしてタグをとろうとするなどのプレーは「オフサイド」の反則となる。オフサイドが起こった場合は、その場所から攻めていた側のフリーパスでゲームが再開される。タグの回数はリセットされてゼロとなる。

タグが起こったら、守る側のプレーヤーはボールより自分たち側のサイドに戻るよう努めなければならない

オフサイドラインは、タグをとられた位置では無く、タグをとられたプレーヤーが保持するボールの位置からゴールラインに水平にひかれたラインとする。

図 9 タグを取られたプレーヤー



タグを取られた直後に、オフサイドラインが生まれ

図 10 オフサイドライン内でパスカット



守る側がオフサイドラインまで下がらずにパスカットすると、オフサイドの反則となる。

図 11



オフサイドライン

守る側はタグが起きたら、オフサイドラインまでいったん戻らなければならない。

第 14 条 タッチ

ボールを持ったプレーヤーがタッチラインを踏んだり超えたり、パスしたボールがコート
の外に出てしまった場合は、その場所から相手チームのフリーパスで再開する。
タッチに出てしまった守る側のチームは、フリーパスを行う場所からタッチラインに垂直
に引かれる仮想の線から、全てのプレーヤーが 5 m 下がらなければならない。

第 15 条 危険なプレー等

ラグビーでは全ての身体接触および身体接触を誘発するプレーが禁止される。
タグをとりにきた手を払う、体当たりをする、相手をつかまえる、また、両手を広げて守
ることもしてはならない。
また、ラグビーではボールをキックすることはできない。
これらの反則が起こった場合、反則が起きた場所から反則をしていない側のフリーパス
でゲームは再開される。

指導上の留意点

ラグビーの経験が浅い段階では、ノックオンは反則としなくてもかまわない。その際
には、地面に落ちたボールはそれを落としたプレーヤーが拾っても相手側のプレーヤーが
拾ってもよいが、ボールは立ったまま拾うこととし、ボールへ飛び込む等のプレーによる
身体接触が生じないように注意する。

経験が浅い段階ではタグをとった回数は数えなくてもよいが、レベルが高まってきたら、
守る側が 4 回タグをとったら攻守交代という規則で行う。タグの回数は、コートの広さや
プレーヤーの力量に応じて 3 ～ 5 回程度で工夫する。

経験が浅い段階では、タグをとられた後に止まろうとしているならば、オーバーステップ
の反則は厳格にとらなくてもよい。それが起こっても、その場所までいったん戻ってパス
をやり直すなどの適用が考えられる。

経験が浅い段階では、ゴール直前でタグをとられても、直後（3 歩以内）にインゴールに
入ったトライは認めることにしてもよい。ただし、タグをとられたらただちに止まらなけ
ればならないので、故意に止まらずにトライをとりにいくことのないよう注意する。

堅いグラウンドや体育館でプレーする時は、ボールを持ったプレーヤーがゴールラインを
駆け抜ければトライとしてかまわない。

経験が浅い段階では、タグをとられたプレーヤーが行う最初のパスを守る側のプレーヤー
はとれないしじゃますることもできないという規則で、オフサイドをゆるやかに適用して
もよい。

コーチは、選手の年齢が低く、筋力、能力、判断力、理解力などが発達途中であることを
充分に理解して指導を行い、レフリーも選手とのコミュニケーションを積極的にとり、
円滑に試合を進められるように努力する。

以上